



The Baseball Hall of Fame and Museum

公益財団法人 野球殿堂博物館

平成30年 野球殿堂入り通知式

館長 廣瀬 信一

当館の休館日である1月15日(月)、午後2時より館内の野球殿堂ホールにおいて、平成30年の「野球殿堂入り通知式」をマスコミの皆様と維持会員の皆様をお招きして行いました。競技者表彰・プレーヤー表彰では、「ゴジラ」の愛称で親しまれた、平成のスラッガー、松井 秀喜さんと、広島、阪神で1492試合連続フルイニング出場の世界記録を達成し、「鉄人」といわれた金本 知憲さんが選出されました。エキスパート表彰では、巨人の4番打者として活躍し、監督として通算12年で日本一3回、セ・リーグ優勝7回、第2回WBCで日本代表を2連覇に導いた原 辰徳さんが選出されました。特別表彰からは、中京商(現・中京大中京高)、中京大の部長・監督などでアマチュア野球の発展に尽力された、故・瀧 正男さんが選出されました。

齊藤 惇理事長から本年度野球殿堂入りの発表、挨拶に続き顕彰者へ殿堂入り通知書が授与されました。永瀬 郷太郎代表幹事より競技者表彰委員会の選考過程について報告がありました。続いて顕彰者の挨拶では、今回出席が叶わない松井さんはお父様の松井 昌雄さんが、「まずは応援して下さいましたファンの皆様に心から感謝」そして「付きっきりで指導していただいた長嶋監督とのご縁が無ければ、本日の名誉ある日を迎えられなかったのでは」とファンの皆さんをはじめ恩師の長嶋さん、そして応援して下さいましたすべての方たちへのメッセージを代読されました。金本さんは「驚きと喜びが交錯している。僕でいいのかなと恐縮する思いの方が強い」と述べられました。続いて原さんは「皆々様のおかげです。感謝しています。それほど誇れる選手ではありませんでしたが、監督としての12年間を評価していただいたのだと思います」と述べられました。

ゲストスピーチでは、松井さんの恩師で巨人終身名誉監督の長嶋 茂雄さんより「いつの日か指導者として、その手で次代の日本を背負える4番打者を育ててほしいと願っています。」とのメッセージが届きました。金本さんの広島入団時の監督でした山本 浩二さんは「他の選手より数倍の努力を重ねた結果、広島的主力選手となった」と教え子を称えられました。原さんには、巨人の大先輩・金田 正一さんが「感無量。良き人たちが殿堂に入って安心しました。真心、誠心誠意、これほどの人はいない。大好きな後輩だ」と大絶賛されました。

今年はここで、時間の関係により殿堂入りされた方々とゲストスピーカーなどを交えた記念撮影となりました。

記念撮影の後、池田 哲雄特別表彰委員会議長より選考過程について報告があり、選出された瀧 正男さんのご長男・克己さんが「野球が本当に好きで、他に趣味もなかった。殿堂入りは家族の喜びでもある。父は本当に幸せな人生を送ることができた」と、時折声を詰まらせながら、喜びを語られました。ゲストスピーカーを務めた教え子の中京大中京高の前監督・大藤 敏行さんは「ユニホームを着ている時は非常に厳しかったが、ユニホームを脱ぐと学生一人一人を尊重してくれた」と思い出を語られました。

例年とは式の進行が変則となりましたが、皆様のご協力で無事に滞りなく、通知式を終えることができました。



後列左から 山本氏、金田氏、瀧 健二氏(瀧氏次男) 大藤氏
前列左から 松井 昌雄氏(松井氏父)、金本氏、齊藤理事長、
原氏、瀧 克己氏(瀧氏長男)

懇親会

今年も、野球殿堂入りをされた皆様、齊藤理事長を始め関係者の方々にご出席をいただき、通知式後の懇親会を東京ドームホテルで行いました。約30人の参加で、一時間位の小宴でした。事前に松井 秀喜さんからの紹介もあり、昌雄さんをお願いして一曲歌っていただきました。他にも、受賞者にまつわる面白いエピソードなどが語られ、和気藹々と親睦を深めることができました。

競技者表彰委員会

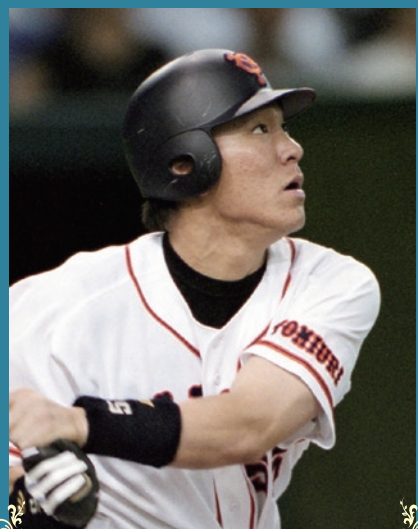
第58回競技者表彰委員会は、プレーヤー表彰で巨人、ヤンキースなど日米5球団で通算507本塁打を放った松井 秀喜氏、1492試合連続フルイニング出場のプロ野球記録を打ち立てた金本 知憲氏、エキスパート表彰で監督として巨人を7度のリーグ優勝、3度の日本一に導いた原 辰徳氏の計3人を野球殿堂入りに選出した。

プレーヤー表彰は現役を引退して5年を経過し、かつ引退から21年未満の有資格者の中から幹事会が選んだ17人の候補者を対象に、15年以上の野球報道経験を持つ376人の委員のうち368人から最大7人連記の投票があった。

事務局から各委員への積極的な呼びかけもあって、投票率は97.9%を記録。無効票は1票もなく、有効投票数は史上最多の368を数えた。投票総数は1871。委員1人平均5.1人を連記した計算で、前回の4.5人を0.6人上回った。

有効投票数の75%にあたる当選必要数276票を超えたのは2人。松井氏は得票率91.3%にあたる336票、金本氏は同75.5%の278票を獲得した。

ともに候補1年目で、1960年のヴィクトル・スタルヒン氏、1994年の王 貞治氏、2014年の野茂 英雄氏、2016年の工藤 公康氏に続いての5、6人目の一発当選。1年目の候補者が2人同時に殿堂入りするのは初めてのことだ。



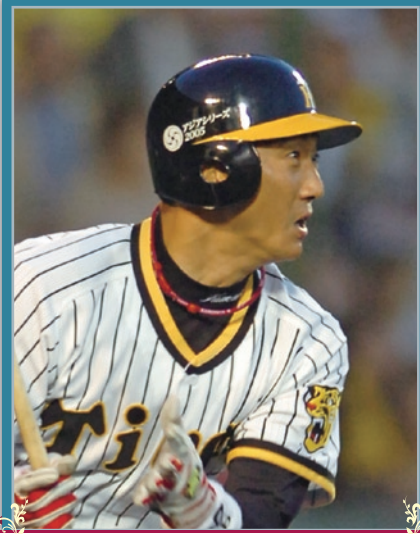
松井 秀喜氏

写真提供：ベースボール・マガジン社

松井氏は43歳7カ月での殿堂入り。2014年に45歳4カ月で当選した野茂氏を抜く史上最年少の殿堂入りとなった。候補1年目ではスタルヒン氏の97.3%、王氏の93.2%に次ぐ3番目の高率当選となった。

金本氏は現在阪神タイガースの監督を務めており、現役監督の殿堂入りは1965年の川上 哲治氏、鶴岡 一人氏、2011年の落合 博満氏、2014年の秋山 幸二氏、2016年の工藤 公康氏、2017年の伊東 勤氏に続いて7人目となった。

次点は得票率65.8%の242票を集めた立浪 和義氏で、45.9%にあたる169票の高津 臣吾氏、38.0%の140票を獲得



金本 知憲氏

写真提供：ベースボール・マガジン社

した佐藤 義則氏が続いた。佐藤氏は今回がプレーヤー表彰の資格最終年で、今後はエキスパート表彰の対象となる。

エキスパート表彰は幹事会が選んだ14人の候補者を対象に、すでに殿堂入りしている方と競技者表彰委員会幹事、30年以上の野球報道経験を持つ計127人のうち122人から最大5人連記の投票があった。こちらも96.1%の高投票率をマーク。昨年殿堂入りし、今年1月4日に亡くなられた星野 仙一氏の投票用紙も昨年12月11日の消印で博物館に届いた。

プレーヤー表彰と同じく無効票はなく、有効投票数122。投票総数498、1人平均4.1人連記（前回は4.2人）の投票で、原氏が有効投票数の78.7%にあたる96票を獲得して殿堂入りした。



原 辰徳氏

写真提供：読売巨人軍

原氏はプレーヤー表彰の資格最終年となる2015年に243票を獲得しながら、当選必要数249票にわずか6票及ばず、惜しくも当選を逃した。エキスパート表彰の候補に回って2年目の殿堂入り。巨人の監督としてだけではなく2009年第2回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)の日本代表監督として侍ジャパンを2大会連続の優勝に導いた功績も高く評価された。

次点は得票率65.6%にあたる80票を獲得した権藤 博氏で、46.7%の57票を集めたランディ・バース氏、41.0%の50票を

数えた田淵 幸一氏が続いた。

今回はプレーヤー表彰で松井、金本両氏、エキスパート表彰で原氏が殿堂入り。競技者表彰による殿堂入りは、斎藤 雅樹氏、工藤 公康氏、榎本 喜八氏が選出された第56回、伊東 勤氏、星野 仙一氏、平松 政次氏が選ばれた第57回に続いて3年連続で3人が加わり、合計95人となった。

(競技者表彰委員会代表幹事 永瀬 郷太郎)

特別表彰委員会

昨年は東大野球部から毎日新聞に籍を置き、日本野球規則委員、東京六大学野球連盟公式記録員を務めた鈴木 美嶺氏と、明大出身で、長年アマチュア野球の審判員を務めた郷司 裕氏の2名が晴れて野球殿堂入りを果たした。

今年1月9日に平成30年、第57回特別表彰委員会が行われた。候補者は昨年殿堂入りの栄誉に輝いた鈴木氏と郷司氏を除いた8名の候補者の他に新たに2名の候補者が加えられ、計10名の候補者の中から選考委員による投票が行われた。

新たに候補者として加えられたのは、元審判員の富澤 宏哉氏と漫画家水島 新司氏の2名である。

午後2時から行われた選考委員会の投票の結果、瀧 正男氏の野球殿堂入りが決まった。

14名の選考委員の投票により、獲得票数75% (11票) を獲得した者が殿堂入りの栄誉に浴することが出来るわけだが、本年は前記の瀧氏が14票中13票を獲得。殿堂入りが決まった。



瀧 正男氏

瀧氏は1921年(大正10年)9月8日生まれ。2012年(平成24年)4月2日没(90歳)。36年、中京商(現中京大中京)に入学。翌37年夏の甲子園大会で優勝メンバーとなる。さらに翌38年春の大会にはプロ野球に入り237勝を挙げる野口二郎投手とバッテリーを組み、春夏連続して甲子園大会で

優勝する快挙を実現した。

49年11月から愛知県尾西市の起工高の監督に就任すると、指導者として抜群の指導力を発揮した。後にプロ野球に飛び込み、大打者になる山内 一弘選手を発掘。投手から打者に転向させ、基礎を築き上げた。

53年から中京商野球部部長兼監督に就任。54年夏と56年春の甲子園大会で、全国制覇を果たす。選手として指導者として、その両方で甲子園大会優勝の夢を実現した。

56年から中京大学野球部部長兼監督に就任。愛知大学野球連盟で連続11シーズン優勝の快挙を達成する。これは同連盟初の快挙だった。瀧氏が在任中には計28回のリーグ優勝を達成する。

67年には愛知大学野球連盟結成20周年を記念して、全日本大学野球選手権が、初めて名古屋地区で行われた。同大会誘致にも瀧氏は貢献したのだ。

70年には、全日本大学野球選手権で初優勝を飾る。6月24日、神宮球場で行われた決勝では関大を倒して、日本一の快挙を達成。部長就任15年目の快挙だった。教え子たちから胴上げされる瀧部長が、神宮球場のカクテル光線の中で舞った。以降、全日本大学野球選手権を制した愛知県勢はいない。

その年、秋に行われた第1回明治神宮大会では、決勝で東海大に敗れたものの、準優勝を飾る。

瀧氏の指導力は愛知県を初めとする東海地区の大学野球が、全国区に躍り出る基礎を作り上げた。愛知県下の高校球児の受け皿を作るばかりか、同地区の大学野球のステイタスを高める役割さえ果たすと同時に、一般大学生の地元での就職率を飛躍させる一因にもなった。

89年夏には愛知大学野球連盟選抜チームを率いて、旧ソ連の極東ハバロフスクへ遠征。愛知大学野球連盟結成40周年行事の一環だったが、地元の大学生のチームと試合をすると同時に野球教室も行い、野球の国際化にも一役買っている。

教え子には監督として沖縄水産高を率いた故・裁 弘義氏を初め多くの指導者を育て、アマチュア野球界の発展に貢献した。

中京大学教授(92年からは名誉教授)。愛知大学野球連盟副会長を歴任するなど、数々の要職を務めた。

(特別表彰委員会議長 池田 哲雄)

殿堂入りの人々を語る(58)

祖父 安部 磯雄 の思い出

安部 幾雄 (1959年野球殿堂入り 安部 磯雄氏孫)



安部 磯雄氏

祖父 安部 磯雄は、明治維新の3年前、幕末の1865年に、福岡で黒田藩士の次男として生まれました。14才で英語を学ぶため京都に行き、同志社英学校に入学、新島襄先生の薫陶をうけ、26才で米国に4年間留学しました。

1899年34才の時、同志社を退職して上京し、東京専門学校（早稲田大学の前身）の教師となりました。安部 磯雄は謹厳、重厚、高潔な教育者、政治家、敬虔なクリスチャンとして知られていますが、上京当時はスポーツ好きな元気一杯の青年教師でした。当時の生徒によると、授業は厳格そのもので、一定のプランを立てて、それをきちんと守り、どしどし進めていくというもので、生徒たちはどうあってもちゃんとしなければならなかったとのこと。しかし、怒りもしないし、叱ることもない先生だったそうです。

一方、毎日授業が終わると、まずテニスコートへ行き、学生相手にテニスをやり、その後野球グラウンドへ行き練習を熱心に見るのが日課でした。そして、謹厳な人柄からすると意外に思えるのは、懸賞好きなことです。野球でもテニスでも学生によく懸賞を出したようで、ふつうは勝ったら食事をご馳走するというようなものですが、ある年の野球部合宿では、地元チームに10点以上差をつけて勝ったら、大相撲本場所に招待するという懸賞をだしたそうです。盛り上がった合宿の光景が目に浮かびます。

1902年、東京専門学校が早稲田大学となり、安部 磯雄は初代野球部長、庭球部長となりました。そして、3年後の1905年40才の時に、誰もが想像だにできなかった早稲田大学野球部の日本初の米国遠征を実現させ、自ら部長、監督、マネジャー、通訳の4役をつとめ、この大事業を成功させました。丁度、日露戦争のまさに日本海海戦の日と重なる時期のことでした。この米国遠征で主将をつとめ、後に都市対抗野球大会を創設し、野球殿堂にその名が刻まれている橋戸 信（頑鉄）氏とのエピソードは、いかにも草創期の野球部の雰囲気伝えてあります。橋戸氏は青山学院から入学してきましたが、野球の名手であったにもかかわらず、大学ではテニスをやろうと思っていたようです。橋戸氏と安部 磯雄は、入学早々から非常にうまが合い、テニスでダブルスを組み、学内トップの力を発揮、コート開きの大会では全勝で銀盃を獲得した程でした。当時は野球部と庭球部が合同で合宿をしていました。橋戸氏はテニスのために参加していましたが、野球の腕が高いことがわかり、安部 磯雄が自ら説得し、野球部に入部しました。野球部の歴史と庭球部の歴史の双方にお名前が出てくる稀有な人材です。

実は、私の父親である安部 磯雄の長男 民雄は、早稲田大学で庭球部の選手でした。全日本テニス選手権で優勝し、日本の代表選手として国際大会でも活躍しました。橋戸氏と安部 磯雄は民雄の国際試合と一緒に観戦したことがあったようで、磯雄は息子が外人に対抗するには体力が足りないなど言っていたそうです。

磯雄は2男6女の子福者であり、孫も22人と恵まれていました。私はその12番目として、磯雄が73才の時に生まれました。ものごころがついた時は戦争末期であり、私共家族は疎開していたため、祖父と顔を合わせる機会はほとんどありませんでした。ただ、戦争が終わる数か月前に東京の空襲がひどくなったため、祖父、祖母は私共と同じ村に疎開してきました。当時、既に祖父は80才でしたが、子供心に礼儀正しい、謹厳なふるまいに感銘を受けたのを覚えています。訪問してきた人に対しては、村の青年でも正座し、背筋をぴんと伸ばし、穏やかに対面していました。また、ある日、小学2年生である私に付近の地理について質問があり、地図を書いて説明したところ、よく出来たと言ってお小遣いをもらい、びっくりしたのを覚えています。

安部 磯雄は、幕末の激動期に生れ、敗戦という最も困難な時期に晩年を迎えました。どのように時代が変わっていても、信念を変えることなく、人のため、社会のために尽くし、野球を愛した安部 磯雄の84年の生涯は、結果的に時代を先取りしていたと思います。

「第2回 野球で自由研究！コンテスト」のご報告

野球殿堂博物館は昨年に続き小学生を対象に「第2回 野球で自由研究！コンテスト」を開催しました。作品応募期間は6月30日から9月30日までで、昨年を上回る95人から応募がありました。

審査は10月5日(木)、6日(金)に山中 正竹氏、ジョイス津野田幸子氏、廣瀬館長の3名の審査員で行われました。厳正な審査の結果、最優秀賞には岐阜県6年・近藤 匠(こんどう たくみ)さんの「ホームランが打ちたい」(ファイル2冊、91ページ)が選ばれました。近藤さんの作品はヒットはどうしたら打てるのかを、お手製の実験装置を使い実験を行った後、実際に打ってみた結果を記録したもので、研究者の様なアプローチの作品でした。

優秀賞には東京都2年・伊藤 祥大(いとう よしひろ)さん、大分県2年・川野 竜弥(かわの たつや)さん、千葉県4年・今村 優斗(いまむら ゆうと)さん、岐阜県5年・加藤 隼平(かとう じゅんぺい)さん、山口県6年・岡本 一颯(おかもと いっさ)さん、千葉県6年・鈴木 友瀬(すずき ともせ)さんの6名が選ばれました。



審査のようす



選ばれた7名の作品は、11月25日(土)から12月10日(日)の期間、「第2回 野球で自由研究！コンテスト作品展」として企画展示室でその他の作品とともに展示されました。11月26日(日)には表彰式を行い、3名の審査員による講評の後、7名にはそれぞれに賞状が贈られました。また、副賞として最優秀賞の近藤さんには、侍ジャパンの稲葉 篤紀監督のサインボールが、優秀賞の6名にはサイン色紙が贈られました。

今年は、表彰式のあと懇親会を開催しました。受賞者とそのご家族、審査員のみなさんなどが出席し、山中 正竹さんの乾杯で会が始まりました。ご家族同士、また審査員と歓談されたりと、和やかな会になりました。会の最後のころには、山中 正竹さんの「野球教室」が始まり、野球をやっている受賞者にとって、大変有意義な時間になったと思います。

このコンテストは当館のミッションである「次世代を担う子どもたちへ、野球の魅力や楽しさを伝え、「ひろげる」ため」の中心的活動であると捉え、来年も続けていきます。

「第2回 野球で自由研究！コンテスト」の最優秀賞・優秀賞に輝いた作品はこちらのアドレスからご覧ください。

<http://www.baseball-museum.or.jp/jiyu-kenkyu/contest/award.html>

野球殿堂博物館 トピックス (2017年11月~2018年1月)

トークイベント 11/16 「張本 勲 氏のロストボールパーク回顧」開催

11月16日(木) 16:00から約1時間、東映や巨人等で活躍した張本 勲氏(1990年殿堂入り)に、東京都内にかつて存在し、所属チームの本拠地でもあった駒澤野球場、後樂園スタジアムに加え、東京スタジアムにまつわる思い出や、その球場で繰り広げられた当時のプロ野球について、語っていただきました。



11/18 「公式記録員のしごと」開催



企画展「プロ野球 東京のロストボールパーク」では、各球場での名勝負を公式スコアから振り返るといった展示も実施。これにあわせて、11月18日(土) 15:00より日本野球機構 記録データ管理部 記録課長 山川 誠二氏によるトークイベントを開催し、各球場のお話や、公式記録員とはどのような仕事なのか等、普段なかなか聞くことのできない公式記録員の生の声をお届けしました。

1/21 “野球報道カメラマンのしごと”開催!



企画展「野球報道写真展2017」記念トークイベント“野球報道カメラマンのしごと”を開催しました。「スポーツ報知」で活躍する関口 俊明カメラマンと、進行役として東京写真記者協会事務局長の池田 正一氏をお迎えし、野球に携わる報道写真カメラマンの業務内容、苦労話、裏話を、関口カメラマンの撮影した写真とともにご紹介しました。

表彰式他

11/21 NPB スピードアップ賞表彰式開催

野球殿堂ホールにて、NPBのコミッショナー表彰である「ローソンチケット スピードアップ賞」表彰式が開催されました。受賞者の牧田 和久投手(埼玉西武)、京田 陽太選手(中日)が登壇し、表彰を受けました(中日・バルデス投手、埼玉西武・源田 壮亮選手はご欠席)。また、チーム表彰として、読売ジャイアンツ、埼玉西武ライオンズが表彰されました。



左：京田 陽太選手 右：牧田 和久投手

11/22 ジャイアンツ vs ホークスOB戦記者会見開催

2018年2月10日に開催される「読売巨人軍 宮崎キャンプ60年記念 ジャイアンツ vs ホークスOB戦」の記者会見が、野球殿堂ホールで開催されました。



巨人軍OB会長の柴田 勲氏とホークスOBチームの総監督を務める野村 克也氏(1989年殿堂入り)が登壇し、試合に向けての思いを語りました。



左：柴田 勲氏
右：野村 克也氏

11/25 日本プロ野球OBクラブ ファンミーティング開催

当日は14:00で閉館し、15:00より日本プロ野球OBクラブ主催の同クラブの賛助会員向け企画「ファンミーティング」が開催されました。ゲストとして、田淵 幸一氏、石毛 宏典氏、高橋 慶彦氏、宇野 勝氏が登場し、当館スタッフの案内で一緒に館内をご見学いただきました。



写真下は、ご自身のバットを前に解説する田淵氏と案内の廣瀬館長。



来館

12/16 企画展「野球報道写真展2017」に東大・宮台投手が来館！



当日より始まった企画展「野球報道写真展2017」に、北海道日本ハムファイターズに入団する東京大学・宮台 康平投手が来館し、ご自身の写真（10/8 東大15年ぶり勝ち点、10/30 東大・宮台指名あいさつ）にサインを書き入れていただきました。

1/11 NPB新人選手見学

NPB新人選手研修会（東京ドームホテル）開催に先立ち、プロ野球に入団した選手104名と審判員1名が当博物館スタッフの案内のもと、館内を見学しました。



12/24 伊東 勤氏ご来館！

2017年野球殿堂入りの伊東 勤氏が来館され、館内をご見学されました。伊東氏の母校である熊本工業高校出身で野球殿堂入りされている川上 哲治氏（1965年殿堂入り）や吉原 正喜氏（1978年殿堂入り）のレリーフ等を、熱心にご見学されました。



企画展情報

長嶋茂雄 プロ入り60周年記念展 「昭和、平成と長嶋茂雄」

会期：3月3日(土)～5月20日(日)予定
 協力：読売巨人軍、読売新聞社

2018年は“ミスタープロ野球”長嶋 茂雄氏がプロ入りして60周年となります。選手としての攻・走・守だけでなく、存在そのものがプロ野球の魅力を実現し、現在も多くのファンに愛されています。昭和、平成という時代を通じ、長嶋氏が日本野球史に刻んだ燦然と輝く足跡とその魅力を、写真、映像や実物資料を通じてご紹介します。



博物館からのお知らせ

▶理事長の交代

熊崎 勝彦理事長が退任し、12月27日付で斉藤 惇（さいとう あつし）氏が理事長に就任いたしました。

《斉藤 惇氏》



1939年10月18日 熊本県出身
 慶応義塾大学商学部卒業
 野村證券副社長、産業再生機構社長、東京証券取引所社長などを歴任。
 2017年11月 日本野球機構会長、日本プロフェッショナル野球組織コミッショナーとなる。

▶訃報

2017年野球殿堂入りの星野 仙一氏が1月4日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

▶販売中

●《新発売》ボールペン 価格 1,000円(税込)
 キャップに「The Baseball Hall of Fame and Museum」と記された博物館オリジナルのボールペンです。
 来館記念、お土産にいかがですか。



替芯：ゼブラ F-0.7芯

博物館のご案内	場 所	東京ドーム21ゲート右
	開館時間	3月1日～9月30日 AM10時～PM6時 10月1日～2月末日 AM10時～PM5時 (入館は閉館の30分前まで)
	入館料	大人 600円(500円) } ()は 高・大学生 400円 } 20名以上の団体 小・中学生 200円(150円) 65歳以上 400円
	休館日	月曜日(祝日、東京ドームでの野球開催日、春・夏休み中は閉館) 年末・年始(12月29日～1月1日)
《2月・3月・4月の休館日》		
2月 5日・19日・26日 3月 5日・12日・19日 4月 9日・16日・23日		

●編集後記 さて、今年の野球殿堂入りの方々が決まりました。プロ野球もチャンピオン、選抜高校野球大会の出場校も決まり、いよいよ2018年の野球シーズンが始まりました。今シーズンは、どんなドラマが生まれるのでしょうか。

野球殿堂博物館 Newsletter 第27巻 第4号
 2018年2月6日発行(年4回発行)
 編集・発行 公益財団法人 野球殿堂博物館
 (旧・財団法人 野球体育博物館)
 〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61
 Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369
<http://www.baseball-museum.or.jp/>



The Baseball Hall of Fame and Museum

公益財団法人 野球殿堂博物館

リレー随筆 (69)

忘れられない1日

競技者表彰委員会幹事 大橋 雄介 (関西テレビ)

未だに記憶に残る試合がある。アナウンサー人生で初の優勝実況だけでなく、何とも不思議な感覚に包まれた試合だった。試合終了が23時を過ぎ、今では考えられないが中継終了したのが23時30分近く。延長延長で、放送席には6時間近く座っていたことになる。それも当時大人気だったドラマの最終回スペシャルが放送される日だった。2002年9月24日、阪神-巨人伝統の一戦、巨人はマジック1で甲子園に乗り込み、勝つか、負けても2位のヤクルトが負ければ巨人が優勝するという試合。阪神は序盤、阿部 慎之助のホームランなどで2点リードを許し、今岡 誠が一矢を報いる1発を放つも、試合中にヤクルトが負けたためジャイアンツの優勝は決まっていた。が、本当にスポーツは下駄を履くまで分からない、その言葉通りだった。初の優勝実況が甲子園でそれも巨人、色々な思いを巡らせながら、最終回に巨人のマウンドに上がったのは守護神・河原 純一、このまま河原が抑え、原 辰徳監督が宙に舞うものもあかなと、頭の隅に描いた瞬間、4番・濱中 おさむがバックスクリーンに同点のホームラン。阪神が「巨人に勝たせて優勝はさせるか」というような1発で2対2となり試合は振り出しに。巨人はその後も勝ち越しのチャンスが延長11回にもあったが得点できず最終回に。この時は資料なんか関係なく、とにかくこの12回をしゃべりきることに集中していた。1アウトから今岡、赤星 憲広がヒットで出塁し、田中 秀太が四球で1アウト満塁、マウンド上には前田 幸長、打席には9回に同点ホームランを放っている濱中、1-1から投じたボールは暴投となり、グラウンドを転々と今岡が両手を挙げながらホームイン「なんというあっけない幕切れ」、それが5時間1分を締めくくる言葉だった。筋書きのないドラマは、ここでも終わらなかった。阪神ファンはサヨナラ勝ちで、まるで優勝したような盛り上がりで六甲おろしの大合唱、騒然とする中、原監督がゆっくりとベンチから出てきていよいよ胴上げ。この時だけは阪神ファンよ、ブーイングだけはやめてくれと願った。しかしそんな心配は無用だった。球場全体から、ライトスタンドからも大きな大きな拍手が巨人の選手たちに贈られているではありませんか。本当に球場全体で戦い抜いた両チームの健闘を称え、そして巨人の優勝を祝っている、言葉では表現できないような素敵なワンシーン。原監督の胴上げが始まった時も、球場全体で原監督を労っていたかのような空気だった。優勝実況は、胴上げの回数を言うのが常道のような感じがあるが、その時は甲子園の歓声、そこにいる者しかわからない肌感、空気感、そしてカクテル光線の中で胴上げされる原監督、「これだけで他に何1つ余計なものはいらない、アナウンサーのコメントもいらない」、そう判断し映像と甲子園のノイズだけで胴上げシーンを描いた。当然、後日「なんで胴上げの回数を言わなかったの」とお叱りを受けたが、現場で感じたことを大切にしたいあの時の判断は、間違いでなかったと今でも思っている。近年野球中継が地上波で減っていく中で、1日のゲームでこれだけの事を経験させてくれる野球というスポーツの奥の深さを、心の底から感じた日でもあり、私達は諦めることなくこの競技の魅力伝えていかなくてはいけないと、執筆をしながら改めて再認識した次第である。くしくも2002年は、星野 仙一さんが阪神監督に就任された1年目、突然の訃報に言葉を失いましたが、心よりご冥福を祈ります。